

2021年10月17日（日）「御言葉の受肉」

ガラテヤ 1:11-12

11 きょうだいたち、どうか知っておいてほしい。私が告げ知らせた福音は人によるものではありません。12 なぜならこの私は、その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、実にイエス・キリストの啓示を通して受けたからです。

使徒 9:1-18

1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺害しようと意気込んで、大祭司のところへ行き、2 ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。3 ところが、旅の途中、ダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、私を迫害するのか」と語りかける声を聞いた。5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「私は、あなたが迫害しているイエスである。6 立ち上がって町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが告げられる。」7 同行していた人たちは、声は聞こえても、誰の姿も見えないので、ものも言えず立っていた。8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

10 ところで、ダマスコにアナニアと言う弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。11 すると、主は言われた。「立って、『まっすぐ』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。彼は今祈っている。12 アナニアと言う人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、私は、その男がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて縛り上げる権限を、祭司長から受けています。」15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らの前に私の名を運ぶために、私が選んだ器である。16 私の名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、彼に知らせよう。」17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、私をお遣わしになったのです。」18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、19 食事をして元氣を取り戻した。

【序論】

「あなたはなぜキリスト教に入信したのですか？」「どうして他の宗教ではなくキリスト教だったのですか？」誰かからそのように訊かれたことがあるでしょうか。私の妻は元々キリスト教とは無縁の環境で生まれ育ちましたが、思春期の頃から「真理とは何か」ということを考え始め、聖書の中にそれを見出したようです。一方、私のように牧師家庭で生まれ育った者にとって、教会生活というのは「生活の一部」でしたので、物心がつく頃までそういったことを真剣に考える余地はありませんでした。しかし、本当の意味で「入信」するにあたっては、自分の中で皮剥けなくてはならない所謂「ステップ」のようなものがありました。それがなければ、私は信仰の道からフェードアウトしていたことでしょう。もう少し突っ込んだ言い方をすれば、それは「救い主イエスとの人格的な出会い」です。この出会いがあったという点においては、妻も私も同じです。この出会いは「何となく習慣として教会生活を続けていく」という *fuzzy* な感覚では済まされない何かを人に求めてきます。自分が信じた事柄（罪の赦し）を宣べ伝えずにはおられない、押し出されるような力を受けるのです。信仰において「脱皮」しようとするときに不可欠なもの、それは福音の内容に関する知識です。まず、頭で福音を理解しなくてはなりません（何も聞いていないところに信仰は生じない）。そして、知識がその人の内で受肉するとき初めて信仰に至るのです。「受肉」のことを英語では「*incarnation*」と言いますが、神学的には「神が人間の肉体に宿った出来事」のことを言います。もう少し一般的には「具体化」とも訳される言葉ですが、単なる観念だったものがその人の内で生きたものへと変換される、聞いてきた事柄を魂で理解し受け留める段階に入ると言うことができるでしょう。

【本論】

ガラテヤ 1:11 以下には、パウロの救いの証が記録されています。比較的長いので複数回に分けて取り次がせていただく予定ですが、これを所謂パウロの自叙伝として読むこともできなくはありません。確かに 2:14 まで、彼が過去に経験した固有の出来事が段階を追って綴られていきます。しかし、パウロがこれを通して自分の栄光ではなくキリストの栄光を現そうとしている点が重要なのです。読者はこれを彼の「救いの証」として読むべきでしょう。証とは、語る人の武勇伝ではなく、彼／彼女を救いに導いてくださったキリストの恵みを宣べ伝えるもの。恵みが語られるところには、常に自分の罪・過ちがその前提に置かれているのです。

本論 1. パウロが告げ知らせた福音

きょうだいたち、どうか知っておいてほしい。私が告げ知らせた福音は人によるものではありません。(1:11)

「どうか知っておいてほしい」と、これから語られる証言の重要性が強調されています。本節には、突っ込んで考えたいポイントが二つあります。

①私が告げ知らせた福音

ガラテヤ教会はパウロ自身が開拓した教会でした。彼が宣べ伝えたものとは「自由」であった。まことの自由。どんな人でもキリストの恵みに依り頼むならば、如何なる人間の業とも無関係に、無償で救いが与えられるという約束です。これが異邦人に向けてのメッセージであるという点が重要でした。私たちの想像も及ばないほど、当時のユダヤ人が異邦人を見る目というのは差別的であったからです。それまでの常識としては、ユダヤ人だけが神と契約を結んだ民であり、救いは血筋としての「選び」に基づくものと考えられていました。ユダヤ民族という少数の民だけに神の恵みは注がれていると認識されていたのです。それに対し、異邦人は生まれながら神との契約関係から除外されており、契約のしるしとしての割礼を受けておらず、律法に基づく生き方を知らない。救いにあずかる資格のない民にほかならなかったのです。しかし、パウロはそのような「遠く離れた」ガラテヤの人々の中に入って行き、福音を宣べ伝えました。神はそのような民族的差別を撤廃されたのだと。キリストにあるならば、誰であっても、どんな道を通ってきた人でも、信仰によって救われる。割礼は必要ない。救われるために律法を遵守しなくてもよい。そもそも神が求める基準に適う人など一人もいないのだから。

教会内で気をつけなくてはならないのは、所謂「優等生」が褒めそやされる場となってしまうことがないようにということです。「クリスチャンとはこうでなくてはならない」という観念がいつの間にか出来上がり、その型にはめこむ風潮が出てくるとき、その共同体はいつしか独自の律法主義に陥っているかもしれません。救いの条件として人間の側が行なわなくてはならない「業」は一つもないのです。救われるためには確かな信仰と告白があればよい。その原点に常に立ち返らなくてはなりません。

②人によるものではない

11 節でパウロが強調するもう一つの点は、彼が宣べ伝えている福音とは人間を根拠とするものではないということです。このことについては 12 節で更に具体化されていきますが、パウロは誰かの考えを踏襲して「受け売り」をしているのではないと言うの

です。主イエスご自身が彼に現れ、教えてくださった。このことは特に、パウロの反対者に対する反論として語られています。彼らはパウロについて「あいつはエルサレム教会の権威の下で使徒とされたに過ぎない。それなのにエルサレム教会の教えとは違うことを宣べ伝えている」と言っていました。では、次にその中身を見てまいりましょう。

本論 2. 知識としての福音

なぜならこの私は、その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、実にイエス・キリストの啓示を通して受けたからです。(11:12)

今日は、パウロが救いに至った経緯を振り返る意味で、使徒 9:1-18 を併せて読んでいただきました。彼が元々厳格なユダヤ教徒で、その中でもとりわけ（神に近づく手段として）律法を遵守することに全生活を投入していたパリサイ派に属する者であったことが、そこかしこで証しされています（使徒 22:1-5、ピリピ 3:4-6 等）。そのような伝統的ユダヤ教のパラダイムが健在のところにキリスト教が出てきたのです。キリスト教は確かにユダヤ教を母胎として生まれました。それゆえに、言わば「生みの親」であるユダヤ教は、キリスト教を自分たちの枠内の宗教として、同じように律法を守らせ、割礼を受けることによって救われる道を求めたのです。元々パウロはこの路線の筆頭に立つ人であり、律法なしの救い、割礼なしの救いという「新しい教え」は撲滅しなくてはならないという立場で激しく活動していました。

このところから分かる重要な事実は、彼がキリスト教の考え方を周知していたということです。ナザレのイエスの宣教活動をここで振り返る必要がありますが、主イエスが「律法主義」と対峙し、安息日にもあからさまに癒しの御業を行なわれたという証言があります。伝統的なユダヤ教徒にとって、安息日規定は厳格に定められており、歩いてもよい歩数まで決められていました。しかし、彼らが「労働」と見なす癒しの業をイエスは平然と行ない、病に囚われていた人が救われることは、安息日にこそふさわしい神の御業であると主張したのです。愛は律法を超えうるものだと。しかし、主イエスの活動は伝統的なユダヤ教徒から律法違反と見なされ、このことが十字架へと送られた一つの要因になったと言うこともできます。律法を守るかどうかは、命に関わる重大事であったことが分かるでしょう。

パウロがナザレのイエスに直接会ったことはおそらくなかったと思われませんが、その教えの内容は十分に伝え聞いていたところではあります。イエスが殺された後も、その教えが生き続けていることを知り、パウロはそれを根絶すべく迫害を始めました。「私はこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて牢に送り、殺すことさえした」（使徒 22:4）と述べている

ことからして、彼の徹底ぶり、宗教にかける非情さの程が窺えます。私のイメージでは、これは旧約における「聖絶」に値すると思われれます。パウロによる迫害の極致として記されている出来事はステパノの殉教であり（使徒7章）、彼はこの時キリスト教の教えの内容を知っていたからこそ確信を持って殺害したのです。

さて、これらの出来事を通して私がお伝えしたいのは、この頃のパウロはキリスト教の真理を知りながらも、その教えが彼の中で受肉していなかったということです。受肉するどころか、この教えを憎み、撲滅しようとまでしていた。このようなことが起こりうる。今日のメッセージの冒頭に戻りますが、確かに福音は知識として「どういう教えであるか」を理解しなくてはなりません。しかし、聞いて理解したところで、人はいくつかの異なる反応を示していくのです。おそらく、その反応は三つほど挙げられるでしょう。

- ・ 無視する
- ・ 反対する
- ・ 受け入れる

パウロにおける反応は第二の極致でありました。

本論3. イエス・キリストの啓示

このようなパウロが福音を「受け入れられる」ようになるためには、キリストご自身の介入が必要でした。主イエスは、尚も迫害の手を伸ばそうとダマスコへ向かうパウロに現れ、光り輝く栄光の内に、パウロが迫害しているのは彼が熱心に仕えているはずの神であることを示されました。パウロが迫害する教会とは、キリストのからだなる教会（神の教会）であったのです。パウロの意識としては、神への熱心に燃えるあまりに律法に忠実であろうとしていたのですが、実はその律法をもって神を迫害するという倒錯（逆さまの行動）へと彼を追いやっていた。

人間が熱心に行なっていることが、蓋を開けてみると神と人を傷つけているということがあります。これは現在「キリスト教」を名乗る風変わりな宗教の中にも見られるものです。所々に掲げられた看板には、恐ろしい裁きのメッセージが短く綴られており、その出典を「イエス・キリスト」としているのを見ることがあります。彼らの意図としては、短い言葉でもって世の終わりの審きに人々の思いを向けさせようとしているのだと思われれますが、問題の一つは「救い」が語られていないことです。それによって、福音に対する人々の心をかえって閉ざしてしまいかねません。これもまた、キリストを宣べ伝えようとしながら、キリストご自身を傷つけている一つの「倒錯」と言えるのでは

ないか。

パウロは12節で「その福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、**実にイエス・キリストの啓示を通して受けた**」と述べています。「**イエス・キリストの啓示**」という表現には二通りの解釈があります。

①主イエスが開き示してくださった啓示

②主イエスを内容とする啓示

「啓示」というのは、隠されていた事柄が神様によって明らかにされる出来事ですが、主イエスこそ神の愛そのものの現れだったという見地に立つと、②の解釈がふさわしいでしょう。主イエスはパウロに対しても直接現れてくださいました。迫害者を打ちのめすためにではありません。彼を罪から救い出すために現れてくださったのです。神の教会を撲滅しようという恐ろしい罪から彼を救い、その罪を無償で赦してくださった。同時に、その赦しの恵みを宣べ伝える働き人へと召してくださったのです。パウロの宣教の原点はここに 있습니다。救いは無償でいただいたもの。だからこそ、彼は無割礼のままの救いを断じて曲げることはできないのです。

【結論】

私たちの内で「福音」は知識に止まるものとなつてはいないでしょうか。聖書にはこのようなことが書かれている、それを言葉で説明することもできる。しかし、そのように知識がありながらも、実はキリスト知らないということもあるのです。自分自身の状態を探るために、もう一度自問自答してみましょう。福音の内容に対して、自分はどのような反応を示しているか。

①無視してはいないか

②反対してはいないか

③受け入れているか

もし①②に該当することが心に示されるのであれば、祈ってみましょう。「救い主イエス様、パウロの心の目を開かれたように、私の目をも開いてください」と。心から祈り求めるならば、聖霊は確かに働かれるはずです。

【祈り】

救い主なる神よ。福音はまずことばとして呈示される必要があります。しかし、その内容を知るだけでは十分でなく、御言葉が私たちの内で受肉しなくてはなりません。御言葉を聞く機会、それを心に受け入れるために聖霊が働く機会をお与えください。自分が今どのような段階にあるか、どのような状態にあるか、今日御言葉を聞いた私たち一人ひとりにお示してください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
御言葉をもって人の心に語りかけ、ご自身を現し給う、父なる神の愛、
無条件に罪人を受け入れ、その罪をことごとく赦し給う、主イエス・キリストの恵み、
福音を理解する力を与え、その人の内で受肉させ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。